

シンポジウム趣意書

動物と人間の近代史―猫・象・馬―

藤原 翔太 貝原 伴寛
溝淵 智咲 杉本 竜

近年、動物史研究は目覚ましい発展を遂げている。西洋史を例にとれば、二〇二四年一月には、本シンポジウムの登壇者でもある近代フランス史研究者・貝原伴寛の名著『猫を愛でる近代 啓蒙時代のペットとメディア』（名古屋大学出版会、二〇二四年）が刊行され、学界の内外で大きな反響を呼んだ。続く二〇二五年二月には、近代イギリス史研究者・伊藤剛史が『近代イギリスの動物史 歴史学のアニマル・ターン』（名古屋大学出版会、二〇二五年）を刊行し、動物史研究の隆盛を改めて印象づけた。

さらに同年五月には、フランス革命史家ピエール・セルナの著書 *L'animal en République (1789-1802), Genèse du droit des bêtes* (Toulouse, 2016) の邦訳『共和国における動物 フランス革命と動物の権利の起源 一七八九―一八〇二年』（楠田悠貴・三澤慶展・山本佳生訳、法政大学出版局、二〇二五年）が刊行された。セルナは、フランス革命史研究の国際的拠点であるパリ第一大学パンテオン・ソルボンヌ校教授であ

り、国際フランス革命史委員会委員長も務める、同分野を表す研究者である。そのセルナが、これまで社会経済史や政治史を中心として展開してきたフランス革命史研究に動物史の視角を積極的に導入していることは、動物史が今日の国際的な歴史学界において重要な研究潮流となっていることを象徴している。

近年の動物史研究の特徴の一つは、動物を、人間がそれに向けるまなざしを人間自身へと反射させる「鏡」として捉え直す点にある。すなわち、人間は言葉をもたない動物との関係性を通して、自らの存在やあるべき姿を問い直してきたのである。それゆえ、人間社会が変容すれば、人間が動物に向けるまなざしや両者の関係もまた変化する。この観点に立てば、人間社会が大きな転換を経験した近代において、人間と動物の関係にも大きな変容が生じたであろうことは想像に難くない。前述の三著がいずれも近世から近代への移行期を対象としていることは、決して偶然ではない。われわれは、この移行期において人間と動物の関係がいかに変容したのかを考察することを通じて、近代という時代そのものを改めて問い直すことができるのではないか。

以上の研究動向を踏まえ、本年度大会シンポジウムでは、「動物と人間の近代史―猫・象・馬―」をテーマに掲げ、日本史・東洋史・西洋史の各分野において動物史研究を牽引してきた三名の研究者による報告を企画した。

第一報告は、「西洋動物史の軌跡―猫に光があたるまで―」

と題して、貝原伴寛（早稲田大学）がおこなう。動物史は現在では一個の研究領域として確立し、専門誌を有するほどになっている。本報告では、そうした活況を呈するに至るまでの研究史を、西洋史に範囲を絞って概観したうえで、研究の一例として、報告者自身が取り組んだ研究の内容を紹介する。

動物は近代歴史学が成立して以後、研究対象としては周縁的な位置を占め、作家や獣医などの愛好家による著作の対象となった。本格的な歴史学の研究が現れたのは一九八〇年代のことである。英国のキース・トマス『人間と自然界』（一九八三年）やフランスのロベール・ドロールの『動物の歴史』（一九八四年）といった著作がその嚆矢に挙げられる。以後、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけては「アニマル・スタディーズ」的な問題関心が英米で隆盛した。人間社会における動物観の様態や動物の位置づけをめぐる従来の研究とは異なり、そもそも「人間」と「動物」の差異が歴史上、どのように構築されてきたのかを問う視点を有する点が、「アニマル・スタディーズ」として分類される研究の特徴である。いずれも米国の歴史家であるハリエット・リトヴォの『階級としての動物』（一九八七年）とキャスリーン・キートの『寝室の獣』（一九九四年・未邦訳）が、一九世紀の英仏社会でのブルジョワ階級の自意識の形成において動物が果たした役割を論じるなかで、そうした視点の萌芽を示し、後続の研究に範を示した。二〇一〇年代以後は、それまでの研究で支配的であった表象論への偏重を批判し、実在の動物を歴史の行為

主体として復権するよう努める研究が顕在化する。そうした論調をフランスで代表するエリック・バラテは、『動物の視点』（二〇一二年・未邦訳）以来の諸著作において、伝記的なアプローチを用いて具体的な動物の軌跡を史料に探り、その行動の解釈に自然科学の知見を応用する実験的な研究を世に問うて議論を盛り上げている。

報告者は、こうした動物史の展開を踏まえたうえで、猫の西洋社会における位置づけの変化を、一八世紀フランスを舞台に跡づける研究を行い、『猫を愛でる近代』という著作に成果をまとめた。本報告では、動物史全体の争点と関連させながら、その成果を伝える。

次に、第二報告は、「インド・ブラフマプトラ溪谷西部における象の貢納制度とイギリス東インド会社による改革（一七六五―一八〇九年）」と題して、溝渕智咲（東京大学・院）がおこなう。一七六五年以降、イギリス東インド会社は、ベンガル太守下の既存の行政機構を介してブラフマプトラ溪谷西部の徴税に関与し始め、徴税業務の掌握を徐々に進めた。元来、この地域の首長層であるザミーンダール層は、象狩りを実施して野生象を捕獲し、それら象を税としてベンガル太守に貢納していた。本報告では、会社下での象の貢納制度の形態を明らかにし、さらに、会社による徴税制度改革が人間と野生象の関係を変化させたことを論じる。

そもそも、ブラフマプトラ溪谷西部では、イギリス東インド会社が徴税のため関与を強化することになる一七七二年以

前、ベンガル太守・ザミーンダール層・ブータン宮廷という三勢力が象の貢納と象狩りを組み込んだ政治秩序を形成していた。すなわち、ザミーンダール層はベンガル太守とブータン宮廷の双方に臣従の姿勢を示した。その上でザミーンダール層は、ベンガル太守には象を貢納した一方、ブータン宮廷にはブータン人にとっての必需品を送り、代わりに象狩り実施の特権を得ていた。

一七七〇年代から一七八〇年代にかけて、会社は、ブータン宮廷との関係をはじめとする従来の政治秩序を維持するため、ザミーンダール層による象狩りと象の貢納の継続を認めざるを得なかった。ただし、会社は、ザミーンダール層から象を引き渡された後に発生する餌代等の経費を削減したため、頭数不足や健康状態の悪化といった問題が生じた。

しかし、一七八〇年代後半から一八〇九年までに、会社はブラフマプトラ溪谷西部における領域的支配の強化を進め、この一環として一七八八年、象の貢納制度廃止と税の金納化を命じた。もともと、この徴税制度改革は現地の野生象の生態的狀況への適応性に欠けていた。すなわち、ザミーンダール層は貢納用の象を目的とした大規模な捕獲を行わなくなったので、野生象の獣害増加、さらには溪谷外への活動域拡大といった悪影響が表面化したのであった。

最後に、第三報告は、「(愛馬)の眼差し―近世から近代へ―」と題して、杉本竜(桑名市博物館)がおこなう。馬は畜力、輸送、軍事などを通じて、人間社会に多大な影響を与えてき

た動物である。社会性を有するだけではなく、人員輸送適性に加え高い疾走能力という動物学的特徴を持つ馬は、古代の日本列島へ渡来して以降、政治・経済・軍事の基盤を支える不可欠な存在となった。本報告では、この多層のかつ流動的な馬と人間の関係史の中で、とりわけ近世から近代(一八世紀から二〇世紀)にかけて構築された「愛馬」の精神の変遷について、主として歴史学の視点から考察する。

近世における(馬への眼差し)は、徳川綱吉による「生類憐みの令」に象徴される儒学的あるいは仏教的思想を背景とする愛護精神と、馬産地として知られる南部藩の取り組みに見られるような、日常的な馬との接触に起因する愛着感情を含んでいた。この「愛馬」の概念は、近代に入ると国家的な要請のもとで再編される。特に近代競馬の成立は大衆娯楽にとどまらず、軍馬の改良や「愛馬心を涵養」するための強力な装置として機能した。国家総動員体制へと向かう過程で、当初は動物愛護的であった「愛馬デー」は、昭和一四年(一九三九年)四月七日の「愛馬の日」へと変遷し、軍事目的の要素を強くしていく。この潮流は、映画『馬』などのメディアや文化表象を通じて重層的に展開され、国民を巻き込む一大潮流となった。そして、これら一連の取り組みを財政的に支えたのは競馬収益の財源化であった。

このように展開した「愛馬」の精神は、戦地で斃れた馬を悼む「軍馬慰霊碑」に代表される「慰霊」にも色濃く表れている。のちに「愛馬の日」は秋分の日の動物愛護行事へ、四

月七日は「軍馬・軍犬・軍鳩合同慰霊祭」（現在は四月第一日曜日に実施）へと〈愛護〉と〈慰霊〉が形を変えつつ継承されていく。

馬と人間の関係史の解明は、単なる動物愛護の経緯にとどまらない。それは、動物という媒介を通じて、それを取り巻く人間社会の構造や価値観の変容、さらには国家権力と民衆の精神変容を解明するための重要な指針を提供するものであり、本報告はその一端を目指すものである。

三名の報告者は、近世から近代への移行という共通の時代を舞台としつつ、それぞれフランスにおける猫、インドにおける象、日本における馬に焦点を当て、各地域において人間と動物の関係がいかなる変容を遂げたのかを検討する。これらの報告が示すように、動物史は感情史、メディア史、帝国史、環境史、軍事史など、多様な研究分野と交差する開かれた研究領域でもある。その意味で、本シンポジウムは、歴史学を学ぶ者にとって、新たな視座を提供する機会となるであろう。

また、本シンポジウムの意義は学術的な側面にとどまらない。近年、人間と動物の関係は、われわれの日常生活においても大きく変化しつつある。例えば、わが国ではライフスタイルの変化を背景として猫の飼育数が犬を上回り、その差は拡大が続いている。他方で、野生動物と人間の生活圏の接触が増加し、熊をはじめとする野生動物との共存のあり方が社会的課題となっている。このように、「動物と人間」は専門分

野を超えて広く共有される今日的なテーマである。多くの方々に本シンポジウムへ足をお運びいただき、活発な議論が展開されることを期待したい。